

私たちは知った、

原爆の恐ろしさを！



<H25.8.15 下諏訪町戦没者追悼式での報告より一部を掲載> ※現在は 卒業生

下諏訪中学校3年 小柄洞彩音 濱喜和子 牛山昇津 名取ともよ

下諏訪社中学校3年 宮澤優里 山本凜 木暮咲希 仁科日菜子

僕たち私たち下諏訪中学校、下諏訪社中学校の代表者8名は7月30、31日に広島に平和体験研修に行かせていただきました。その目的は、原爆による唯一の被爆国日本、自分たちが後世に伝えていくことができることは何か、を見たり聞いたり感じたりしながら学んでくることです。

戦争の悲惨さや原爆について学び、原爆から立ち直った今の広島を見て、自分たちが伝えられることについて考えてきました。

公園にある原爆死没者慰霊碑には、『安らかに眠って下さい 過ちは繰返ませぬから』とあります。僕は、慰霊碑を見て、人間は何てことをしてしまったのだろう、と思いました。原爆によって亡くなった方々の気持ちが詰まっているような気がしました。



「二度と同じ悲劇を繰り返さないために」

このテーマを達成するには、原爆を体験した方の生のお話が聞けるうちに、メッセージや気持ちを、僕たちが原爆というものをしっかりと受け止めて考える必要があると思います。そして核のない、平和な世界を作っていきたいです。



これは、平和記念公園内にある、「原爆の子の像」です。2歳で被爆した佐々木禎子さんが、10年後に白血病で亡くなったとき、同級生たちが「原爆で亡くなったすべての子どもたちのために、慰霊碑を作ろう」と呼びかけ、全国の3,200余りの学校や、世界9カ国からの寄附によって、1958年5月5日に完成しました。

この像の頂上には、禎子さんをモデルとする少女のブロンズ像が立っています。像の下には、『これは僕らの叫びです これは私たちの祈りです 世界に平和をきずくための』と刻まれた石碑があります。

戦争によって未来を奪われた当時の子どもたちの思いに改めて胸を打たれました。

禎子さんは、千羽鶴を折ると病気が治ると信じて、毎日、入院先の病室で鶴を折り続けました。実際に禎子さんが折った鶴は、今も資料館に残されています。私たちも町内4校で折った千羽鶴を届けました。この千羽鶴には、原爆の子の像とともに、平和な未来への夢が託されています。

被爆体験者の方のお話をお聞きして

68年前の8月6日、爆心地から数キロ離れた学校で被爆された、北川建次さんのお話を聞かせていただきました。

北川さんは、当時小学校5年生、10歳でした。その日8時15分ごろ、校庭での朝礼を控え、教室で過ごしていたそうです。

突然、紫色の閃光に包まれる中、数万度の熱風と爆風が学校を襲い、校舎は全壊しました。何が起こったのかわけも分からないまま、ただ、自分が落下していることだけ感じていた北川さんは、校舎の下敷きになり、気を失いました。目が覚めたとき、幸い、自力で瓦礫の山から抜け出した北川さんは、同じく幸運にも命を取り留めた友だちや先生の救出にあたりました。



しかし、木造作りの校舎にはあちこちから炎が燃え始め、救出できないままの友だちや先生もいたそうです。68年たった今でも、『自分だけが助かってしまい、申し訳ない』という気持ちは消えず、戦争の恐ろしさ、愚かさを若い世代へ語り継ぐことを、生き残った自分の使命として生活されています。

原爆投下直後、また戦後直後の広島は、文字通り、地獄のような状況でした。いたるところに死体が転がり、見渡す限りが瓦礫と焼け野原でした。運よく生き延びたとしても、住む場所も食べるものもなく、明日の命すら保障されない時代を生き抜いた北川さんのお話をお聞きし、私たちが生きるこの時代の平和は、68年前の多くの犠牲の上に築かれたものであることを強く感じました。

原爆投下直後、また戦後直後の広島は、文字通り、地獄のような状況でした。いたるところに死体が転がり、見渡す限りが瓦礫と焼け野原でした。運よく生き延びたとしても、住む場所も食べるものもなく、明日の命すら保障されない時代を生き抜いた北川さんのお話をお聞きし、私たちが生きるこの時代の平和は、68年前の多くの犠牲の上に築かれたものであることを強く感じました。

「松重美人氏撮影/中国新聞社所蔵」



昭和二十年八月六日午前十一時すぎごろ  
撮影された  
原爆の悲劇を語る  
歴史の証人  
「御幸橋西詰」

発行 下諏訪町教育委員会  
編集 生涯学習  
編集委員会

〒393-8501  
長野県諏訪郡下諏訪町4611-40  
(下諏訪総合文化センター内)  
☎ 0266-27-1111(内線718)  
FAX 0266-28-0131  
E-mail=syougai@town.  
shimosuwa.lg.jp